



Title	貧困調査のクリティーク（3）：「まなざしの地獄」再考
Author(s)	宮内，洋；松宮，朝；新藤，慶 他
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要，131，33-54
Issue Date	2018-06-28
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.131.33
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70983
Type	departmental bulletin paper
File Information	020-1882-1669-131.pdf



貧困調査のクリティーク (3)

－「まなざしの地獄」再考－

宮内 洋*・松宮 朝**・新藤 慶***
石岡 丈昇****・打越 正行*****

【要旨】 本稿は、〈生活一文脈〉理解研究会による「貧困調査のクリティーク」として発表し続けている共同研究成果である。3 番目の成果となる本稿では、日本国内における社会学研究の古典の一つである「まなざしの地獄」を対象とした。本稿においては、貧困の〈生活一文脈〉理解のパースペクティブから、個別性にこだわりながらクリティークをおこなった。特に、「N・N」と見田宗介が表記する永山則夫の実際の生活史を愚直にたどり直すことによって、「都市のまなざし」と見田が論じた総体の内実疑問が生じることとなった。「都市のまなざし」によってまなざされる側の個別事情、つまり、集団就職によって地方から上京する「流入青少年」たちの〈生活一文脈〉、そして、彼らを住み込みという就業形態で雇用し、共に生活していく都市部の中小・零細企業の雇用主とその家族の〈生活一文脈〉を捨象しているのではないかという疑問と、都市の劇場性への疑問である。

【キーワード】 まなざしの地獄、永山則夫、都市、演技、生活一文脈

はじめに

人びとを年とらせるもの（略）それは一方ではもちろん身体の緩慢な衰えであり、他方ではわれわれの社会においては人間を労働力、ただひたすら労働力との関連においてのみ扱うという事実だ。結局のところ労働者は後になって年寄りとして扱われるように、始めから手筈が整えられている。彼の生産力が関心を持たれるだけで、それをのぞけば何もののでもないのだ。その結果、この生産力が減少するか完全に消滅するかすると、彼はもう勘定にも入れられなくなる。けれどもそれは彼が一度として勘定に入れられたことがなかったからなのだ。老人ホームの在院者になってから、すでに時が遅くなってから彼は気づかされる。彼の人生全体が、見殺しと搾取によって系統的に破壊されたことに。彼は人生のなかに、わずかばかりの勇気を汲んでくるのに頼みにすべき何もない。今日、年寄りを年寄らせているのは資本主義の搾取なのだ。老人とは幼年時代から利潤のために畸形にされた者のことだ。（Sartre 1974=1975: 153, 下線部は引用者）

サルトルが、主に二人の青年との自由討論で語った言葉から、本稿を始めた。この後、サルトルは、この「畸形化」を拒否する者が若者だと述べる。しかし、その若者たちは実際に拒否することができたのであろうか。資本主義の「畸形化」の力は拒否できるほど、弱々しい力で

*群馬県立女子大学文学部・教授 **愛知県立大学教育福祉学部・准教授 ***群馬大学教育学部・准教授

****北海道大学大学院教育学研究院・准教授 *****沖縄国際大学南島文化研究所・研究支援助手

あったのだろうか。日本国内において、「集団就職」の名のもとに、「金の卵」ともてはやされながら、地方から首都圏に流れ込んできた「流入青少年」について、まさに資本主義によって“成形”させられていく姿を緻密に分析したのが、誰もが知る、日本社会学史に燦然とその名を残す、見田宗介による「まなざしの地獄」である。

本稿は、私たち〈生活一文脈〉理解研究会のメンバーによって、これまで2014年から「貧困調査のクリティーク」として発表し続けている共同研究の成果の第3弾となる（共同研究の成果としては4つ目。宮内ほか 2014a, 2014b, 2015）。今回のクリティークで対象とするのは、上記の日本国内における社会学研究の古典の一つである「まなざしの地獄」である。誰もが知るように、日本国内の社会学領域の質的研究においても看過することなど決してできない、いわばマスターピースである。しかも最近では、「見田宗介の『まなざしの地獄』は、今後の貧困の社会学的研究に対しても大きな影響を及ぼし続けるものだろう」（西澤 2015：11）と西澤晃彦によって綴られるように、貧困調査研究としても改めて脚光を浴びている。この見田宗介の論考に対して、これまでのクリティーク同様に私たちは真正面から挑みたい。

まず、「まなざしの地獄」は「N・Nの生活史記録を軸として展開する」が「N・N論ではない」と見田は述べているが（見田 2008：7）、この「N・N」はかつての死刑囚・永山則夫であるということには間違いない。永山則夫については、すでに筆者（宮内）が臨床発達心理学や日本文学等の異なる角度から論じているが（宮内 2015, 2017a）、ここでも少しだけ述べておく。永山則夫は4人もの一般市民を殺害して世間を震撼させた犯人であったが、彼の生い立ちが明らかになっていくうちに、その信じられないほどの凄惨な貧困の実態に、人々はまた再び驚くことになった。この永山則夫の生活史記録を軸として展開する「まなざしの地獄」は、永山則夫という一人の実在の人物を通した貧困調査研究と言えるだろう。この「まなざしの地獄」を、永山則夫の個別性にこだわらず、改めて貧困調査研究の視角から見ると、見田による華麗な論の展開に疑問符がつく。

それでは、本稿の構成について触れておきたい。

まず1節では、宮内洋が、見田宗介が指摘した二つの表相性について、永山則夫の生活史を踏まえながら、より深く掘り下げて見ていくことによって、都市における「まなざしの地獄」以前の「まなざしの地獄」の可能性について指摘した。

次に2節では、松宮朝が本稿1節を都市における拘束の議論と捉えた上で、都市は果たして自由な舞台だったのかと問う。そして、今なお続く、都市という舞台における演技という視角に対して、永山則夫を取り巻く社会構造を踏まえた上で、疑問を突きつけた。

次に3節では、新藤慶が、「まなざしの地獄」における都市への流入青少年について改めて検討し直すことによって、彼らを受け入れ、さらには日常生活もまた共有することになる都市部の中小零細の卸・小売業の経営者たちの不安について論じた。

最後に、石岡丈昇と打越正行が本稿をまとめた上で、今後の課題にも触れている。（宮内）

1. まなざされた二つの表相性

1.1 「ボヘミヤの箱」

本節においては、冒頭で引用したサルトルの一文、しかも見田が引用するサルトルの一文から始めてみたい。見田は、「まなざしの地獄」の中で、サルトルが描いた、子どもに対する一つのあまりにもおぞましい「虐待」の様相を引用している。

「いまは衰えてしまったようだが、昔、ボヘミヤに栄えた商売があった。それは子供をつかまえてきて彼らの唇をたちきり、頭蓋骨を圧縮し、昼も夜も箱のなかに閉じこめて成長することをさまたげたのである。かかるやり口と、同じような種類の他のやり口とによって、子供たちを非常に面白い怪物、すばらしい報告の対象となるような怪物にしまったのだ。」(見田 2008: 40)¹

さて、この「昔」とは具体的にいつのことなのか。にわかには信じがたい話である。流言飛語研究では、上記の見田が引用したサルトルの文章と、同型の語りにしばしば出会う。例えば、「人間だるま」の話、つまり、旅行中などに誘拐された女性や子どもが手足を切断されて見世物になるという語りである(例えば、Brunvand 1989=1992: 70-1)。

この「昔」とは一体いつなのかが問題になるうが、(資本主義がよちよち歩きにせよ進行している状況であれば)子どもをわざわざ時間をかけて「成形」して見世物にするより、すぐに働かせた方が、「搾取する」側の大人には手っ取り早く“儲け”になるのではないか。その「昔」とされる当時においては、子どもを守る法律もまだなかったのではないか。そのような時代に、なぜ子どもたちをあえて“手間暇をかけて”「非常に面白い怪物」に「成形」しなければならなかったのだろうか。筆者は不思議に感じる。

以前、拙稿(2012)において、『日本残酷物語』に収められていた、身体に障害がある子どもに物乞いをさせるという記録に触れた。物乞いをする際に、大人の側がわざわざ盲目の子どもを借りに来るといったエピソードである(宮本ほか [1959]1995: 66)。例えば、盲目の子どもの一日の賃貸料は80銭であり、「ふつうの子ども」は20銭というように差がつけられている。ここには見世物にするために身体を変形させるといった記述はない。一方で、海外の例として、石井(2009)のルポルタージュに基づき、インドの沿岸都市部における子どもの目を潰す事例についても記した。施しを与える側に同情させるために、あえて子どもたちの目を潰すことはあるようである。

実際に調べてみても、サルトルの語ったことが史実かどうかは少なくとも私には確認できなかった。「まなざしの地獄」においては、このサルトルの文章を引用し、見田自身は、「N・N」をはじめとした都市への流入青少年たちが、まるで「ボヘミヤの箱」(正確には「ボヘミア(Bohemia)」)に閉じ込められている誘拐された子どものように、“都市に「成形」させられていった/していった”という論調で説明する。その説明は華麗であり、当時の都市論としては他とは一線を画していたと思われる。それでは、その流入青少年たちの運命をも成形するという「まなざし」について、具体的に見ていく。

1.2 「顔面のキズ」と「履歴書」

「まなざしの地獄」において、見田は「都市のまなざしとは何か？」と問う。その回答はこうだ。

「顔面のキズ」に象徴されるような具象的な表相性にしろ、あるいは「履歴書」に象徴される抽象的な表相性にしろ、いずれにせよある表相性において、ひとりの人間の総体を規定し、予料するまなざしである。(見田 2008: 40)

さらに、見田は続ける。

そしてこれらの表相性としての対他存在こそが、都市の人間の存在をその深部から限定してしまう。けだし人間の存在とはまさに、彼が現実にとりむすぶ社会的な関係の総体¹に他ならないが、これらの表相性への視線は、都市の人間がとりむすぼうとする関係の一つ一つを、その都度偏曲せしめるということをとおして、執拗にそして確実に、彼の運命を成形してしまうからである。

そしてN・Nが、たえずみずから超出してゆく自由な主体性として、〈尽きなく存在し〉ようとするかぎり、この他者たちのまなざしこそ地獄であった。(見田 2008: 41)

本稿のはじめにでも述べたが、見田宗介による「まなざしの地獄」は「N・Nの生活史記録を軸として展開する」が「N・N論ではない」と述べる(見田 2008: 7)。この文意の解釈は容易ではないだろうが、確実に言えることは、この「N・N」はかつての死刑囚・永山則夫であるということである²。それでは、上記の記述を、永山則夫の生活史記録に即して、具体的に見ていく。永山則夫の「運命を成形してしまう」という他者の視線の先には、永山則夫における二つの表相性があった。すなわち、具体的な表相性とされる「顔面のキズ」、そして、抽象的な表相性とされる「履歴書」である。この二つは、永山則夫による「自伝的小説」では非常に重要なモチーフでもある(宮内 2017a)。

それではまず、具体的な表相性とされる「顔面のキズ」について、少し詳しく見ていきたい。見田は、永山則夫の「顔面のキズ」への「まなざし」が、彼の「運命を成形してしまう」というのである。「まなざしの地獄」においては、大いに依拠されていると見られる鎌田(1970)の「第二部 殺人の原点2 連続射殺事件 永山則夫の場合」に、永山の顔の傷についての記述がある。

子守役の姉の不注意で、則夫が火傷をしたのも、この年の冬といわれる。働きに出ていたヨシの留守中、ストーブに転び、右頬のみもあげ下から顎にかけ約五センチの傷跡が残るという火傷をしたのだ。この傷跡は長じてのちも消えず、上京の翌年、三度目の職場の大阪・守口市で『網走番外地生れ(ママ)』とからかわれる原因となった、と語られるものとなる。(鎌田 1970: 194)

一方で、永山則夫の封印された鑑定記録に基づいて書かれた堀川(2013)には、永山則夫の直近の兄である三男の証人尋問速記録が載せられている。次男の永山則夫への暴力についての

語りにおいて、「則夫の顔のどこかに火傷の跡があったと思いますが、あれも次男が火箸か何かで投げて付けた傷でして、あれはやはり、次男が元ですね。何度か、そういうことがありましたね。」と答えている(堀川 2013: 111)。見田は、永山則夫の「顔面のキズ」という表相性へのまなざしに着目したが、そのような表層的な側面のみではなく、後述するように、永山則夫の「顔面のキズ」、正確には永山則夫の「左頬の火傷の痕」は、永山則夫の“運命を成形してしまう”ある種の刻印であった可能性がある。

次に、具体的な表相性とされる「履歴書」について、少し詳しく見ていく。比喩的なのだろうか、なぜだか見田は簡略化して「履歴書」と記すが、正確には、戸籍謄本に記載されていた永山則夫の出生地であり、この出生地への「まなざし」が、永山則夫の「運命を成形してしまう」というのである。つまり、永山則夫の戸籍謄本には、彼の出生地は「北海道網走郡網走町字呼人番外地」と記されていた(鎌田 1970: 190)³。永山則夫が何の罪もない無抵抗の一般市民を射殺する2年前、1966年1月から勤め始めた大阪府守口駅前の米穀店で、店の主人から(怒鳴られるように)取り寄せるように言われた戸籍謄本には出生地が「網走市呼人番外地」と記されていたのだ。このことから、永山則夫は自らが網走刑務所で生まれたと信じ込んでしまい、周囲が自らのことを辞めさせたがっていると感じるようになった(堀川 2013)⁴。さらに、鎌田(1970)は、この後、永山則夫が自暴自棄になり、あの殺人事件に転がるように突き進んだと考えている。永山則夫がこの大阪府守口市の米穀店に勤める前年の1965年4月に、高倉健主演の映画『網走番外地』(石井輝男監督、東映製作・配給)が封切られ、ブームを起こしていた。実の母親と同じように、とても映画好きであった永山則夫少年が映画『網走番外地』を観ていたかどうかはわからないが、周囲で観ていた人たちは少なくともなかっただろう⁵。永山則夫の思い込みとは異なり、実際には彼は網走刑務所で生まれたわけではなかった。永山則夫による「自伝的小説」の一つである「異水」の中の描写に、「役場の戸籍係」が、永山が刑務所で生まれたのではないと本人に文章で伝えている記述がある(永山 1990)。しかし、問題はそこではなかった。永山則夫にとって重要なのは、彼の周囲が、彼の出生地と「顔のキズ」とを合わせて、彼のことを“まなざされる対象”としていることであったようである。

1.3 「都市のまなざし」以前の「まなざしの地獄」

「都市のまなざし」とは、「顔面のキズ」に象徴される具象的な表相性においても、「履歴書」に象徴される抽象的な表相性においても、「ひとりの人間の総体を規定し、予料するまなざし」であると見田は述べた。永山則夫が「超出してゆく自由な主体性として、〈尽きなく存在し〉よう」とすると、そのまなざしは永山則夫をことごとく捕らえ、その運命を「ボヘミヤの箱の中の子ども」のように成形していくというのである。具体的に述べると、『網走番外地』という一つの日本映画から醸し出されるイメージを起点として、永山則夫の「顔面のキズ」と「網走市呼人番外地」という戸籍謄本の記述は、永山則夫の〈尽きなく存在し〉ようとする可能性を予め奪っていくのだ。

先述のように、戸籍謄本上の出生地については、永山則夫のまったくの誤解であった。永山則夫が一人で勝手に「網走刑務所生まれ」であると誤解していたようだった⁶。もう一つの「顔面のキズ」には固有の事情があった。「網走刑務所」と周囲に結び付けられていた永山則夫の「顔面のキズ」であるが、周囲の者たちが想像していたように、暴力沙汰によってできたものでも、自らの不注意でできたものでもない⁷。永山則夫の「顔面のキズ」は、上記の通り、次男が「火

箸か何かで投げて付けた傷」の跡であると永山の直近の兄（三男）が証言している。双方ともに、鎌田（1970）による永山則夫の生活史記録に依拠する見田の説明と、封印された鑑定記録からの永山則夫の生活史記録、あるいは公的な記録においてはズレが生じている。

本節の筆者は本稿が公刊される前に、「まなざしの地獄」と永山則夫に関する二つの論考を発表している（宮内 2015, 2017a）。前者では、見田宗介による見解に疑問を呈した。「まなざしの地獄」においては、これまでN・Nの転職の多さが奇異なものと見られていたが、当時の「金の卵」としてはやされていた流入青少年たちにおいては珍しいことではなく、公的機関による量的調査の結果を用いて、彼らが堪え性がなくて転職を繰り返すのではなく、休日を求めて転職していたことを見田は明らかにし、この社会学的発見には今なお高い評価が与えられている。ところが、永山則夫の「封印された鑑定記録」が明らかになることにより、永山則夫の壮絶な生い立ちがより一層露わとなった（堀川 2013）。一言で述べるならば、マスメディアによる喧伝によって多くの人の知るところとなった経済的な貧窮の歴史とは別の歴史、永山則夫の被虐待の歴史である。見田の社会学的発見とは異なり、特に幼児期・児童期におけるあまりにも惨い被虐待体験によるトラウマから派生する行動によって、永山則夫は転職を繰り返すことになったのではないかという見田とは異なる見解を筆者は提示した（宮内 2015）。

もう一度、ここで確認しておきたい。見田は、兄たちと同じく貧困ゆえに高校には進学することができなかった永山則夫少年が流入青少年の一人として集団就職のために、青森から東京に移動した後の「都市のまなざし」について描いた。そのまなざしによって、〈尽きなく存在し〉ようという言動は封じられ、その運命までもが「成形」させられていくとした。資本主義社会、特に都市における諸個人の変容に関する指摘は鋭く、華麗である。だが、見田の華麗なる都市論には、永山則夫の生活史記録を丹念に見直すことによって、抜け落ちている点が浮かび上がってきた。つまり、まなざされている側のまなざしの受けとめ方の問題である。都市によってまなざしは「偏曲」させられるかもしれないが、少なくとも永山則夫は、様々なまなざしを先に「偏曲」して受けとめていたことが、その「自伝的小説」や鑑定記録から見て取れる。見田の表現に擬えて述べるならば、少なくとも、永山則夫については、都市に移り住む前の、被虐待体験を中心とした悲惨な体験、言い換えればトラウマ体験によって、〈尽きなく存在し〉ようとした言動はすでに封じ込まれ、「成形」させられていたのではないだろうか。つまり、冒頭の「ボヘミヤの箱」なる比喩を用いるならば、少なくともN・Nは集団就職での上京後に「ボヘミヤの箱」に入れられたのではなく、すでにそれ以前に「ボヘミヤの箱」に入れられ「成形」されていたと言えるのではないだろうか。（宮内）

2. 都市という舞台と貧困：「まなざしの地獄」における演技の意味をめぐって

2.1 都市への斥力、都市への引力

「まなざしの地獄」は、そもそも「都市における人間と疎外」というテーマの依頼原稿であり、初出時の副題は「都市社会学への試論」であった（見田 1973）。こうした経緯から見ても、その中心的主題として都市が焦点化されていることは間違いないだろう⁸。ここで見田は、都市を独自の視点からとらえていく。

「都市とはたとえば、二つとか五つとかの階級や地域の構成する沈黙の建造物ではない。都市とは、ひとりひとりの『尽きなく存在し』ようとする人間たちの、無数のひしめきあう個性、行為や関係の還元不可能な絶対性の、密集したある連関の総体性である」(見田 2008: 7)。

これは、「都市は単なる物質的機構でもなければ人工的な構成物でもない。都市はそれを構成している人びとの活気ある生活過程に含まれており、いわば自然の産物、とくに人間性の所産」(Park and Burgess 1916=1965)とする、パークによる著名な都市の定義に近いように見える。しかし、見田の「ある連関の総体性」としての都市を把握する方法は、 $N \cdot N$ =永山則夫の生活史記録の分析にもとづいている。見田は「都市のまなざし」という概念を駆使することによって、「 $N \cdot N$ の固有性」ではなく、流入青少年の「一般的な情況」(見田 2008: 18)として、都市の総体性をとらえる理論を突きつける。これにより、個人の実存と社会構造を総体性としてとらえた「まなざしの地獄」が持つ、都市論としての射程の奥行きと魅力が生み出されているというのが一般的な評価と言えよう。

しかし、ここではあえて都市に流入する青少年の「一般的な情況」ではなく、 $N \cdot N$ =永山則夫の個性性にこだわってみたい。たとえば、1965年3月末、集団就職列車に乗り込む永山を見送る母親、妹の姿はなかった(堀川 2013: 153-4)。これは、涙にむせぶ多数の中卒者を運んだ就職列車として多くの映画や小説に描き出されてきた集団就職(山口 2016)の「一般的な情況」とはかなり異なるものだ。なぜ、母親と妹は永山を見送らなかったのだろうか。その理由は、永山の極めて過酷な家の存在による。永山は、上京の五ヶ月前に洋品店で万引きをしている。この万引きに対して堪忍袋の緒を切らした母親は、見田(2008: 12)も触れているエピソードであるが、「則夫(が東京に)行ったら、赤飯炊いて喜ぶべし」と妹たちに語っていたという(堀川 2013: 153)。この「赤飯炊く」という言葉は、永山の父親が横死した際に、母親が語ったフレーズである(堀川 2013: 156)。永山にとって、このエピソードは、家から忌み嫌われ、厄介払いされる存在としての意味を痛感させるものだったはず⁹。

こうした家からの圧倒的な斥力とともに、貧しさのために進学をあきらめなければならなかった当時の集団就職の構造的背景を見ておく必要がある。1965年当時の高校進学率の最高値は東京都で83%、最低値が青森県の51%であった。永山の上京は、高校進学率の絶対的な格差のもとでの移動だったのである(山口 2016: 91)。実際に、中学校での成績もずば抜けて良く、地域の評判も高かった永山家の次男は、家の経済状況ゆえに高校に進学することができず、集団就職せざるを得なかった(堀川 2013: 110-1)。

もう一点、見田が都市の引力として指摘する都市の労働力需要に、そもそも格差が内包されていたことも見逃すことができない。「進学率上昇による就職者数の減少と大企業の年少者採用の増加とによって、都市出身の年少者を雇用できなくなった都市部の中小企業・家族企業が、地方出身の新規学卒者に採用対象を絞っ」(加瀬 1997: 148)ていたため、地方出身者は都市出身者に比べ、相対的に中小・零細企業に住み込みという形で就職することが多くなった。1965年の男子新規中卒者の求人倍率3.58倍という都市の引力は、圧倒的な労働市場における地域間格差と学歴の格差として見る必要がある(加瀬 1997)。

こうした都市への斥力と引力のなかで、永山は集団就職によって上京する。この集団就職を、見田は「存在を賭けた解放の投企」(見田 2008: 11)ととらえる。「東京とはほとんど無限の可能性をたたえた<別世界>であったはずである」(見田 2008: 16)というのだ。そして、ここでの上京とは、実体としての東京に向かうことではなく、「家郷の貧しさからの脱出」であり、

「外部から投影された都会の対他存在」(見田 2008: 11)であることを強調する。

しかし、先に確認したように永山の家族をめぐる状況と、地域の労働市場における二重の斥力をもたらす構造を前提にした場合、まぶしい都市の世界にあこがれ、都市という舞台に飛び込む自由で主体的に選ばとられた移動という把握は困難ではないだろうか。これは、当時の状況に規定される「一般的な情況」だけでなく、永山則夫の生活史からも指摘することができる。永山による自伝的小説群にも繰り返し、詳細に描かれている通り(永山 1984, 1990)、その後の密航を含めた移動も、自由に選び取られ、希望に満ちた移動というよりもむしろ、絶望的な状況からの逃避、それ以外に頼りにする存在がないきょうだいの居住地に漠然と向かうものであった(堀川 2013)。「どうしても卒業したい。就職して東京に行きたい」(鎌田 1970: 223)という郷里からの脱出に執着する切実さは、単に貧困であるという以上の、圧倒的な都市への斥力の存在を抜きに考えることができない。ここからは、絶望感、不安、上京していた兄たちの存在をかりうじて支えとし、「特別な希望も夢もなかった」(堀川 2013: 157)という、見田とは対照的な解釈がより現実味を帯びてくる。そしてこの点は、次に見ていくように、自由な舞台として都市という視点の転換を迫るものである。

2.2 都市という舞台、まなざしと演技

上京後の永山について、見田は「だれよりも早く、髪をのばしネクタイをつけたらしい」(鎌田 1970: 227)というエピソードに注目する(見田 2008: 9)。ここから見田は、永山が上京後「おしゃれと肩書き」に邁進することに焦点をあて、演技という視角から解釈をほどく。

では、なぜ演技に注目するのだろうか。ここで登場するのが「都市のまなざし」である。「都市のまなざし」とは、服装や容姿、持ち物といった具象的な「表相性」と、出生、学歴、肩書など抽象的な「表相性」により、「ひとりの人間の総体を規定し、予料する」ものであり、「これらの表相性としての対他存在こそが、都市の人間の存在をその深部から限定してしまう」(見田 2008: 40-1)ものである。この「都市のまなざし」という概念を導入することで、階層、地域の格差といった視点からの単純な構造決定論を超える枠組みを提示するのだ。

こうしたまなざしに対する永山の対抗策と見田がとらえるのが、進学への意欲と身につけるものの高級品好み、すなわち「おしゃれと肩書き」による、具体的、抽象的という2つの「表相性」を反転する実践である。これは「まなざしの地獄を逆手にとったのりこえの試み」(見田 2008: 46)として、<素朴>、<仕事熱心>、<ネバリ強い>など<金の卵>としてのレッテルに対する反抗(鎌田 1970: 258-9)であり、「都市が人間を表相によって差別する以上、彼もまた次第に表相によって勝負する」(見田 2008: 46)ことである。こうした演劇論的な把握は、第1節で詳細に検討された「顔のきず」による拘束の議論と対になるポイントと言える。

さて、見田による一連の分析について吉見俊哉は、「客席から舞台に上がる行為」として、「東京という舞台の上で自己を<演じる>ためのアイテムを買い揃えるようになり、『まなざしの地獄=劇場』としての都市では、偽りの自分を演じることに実存的な回路があると感じていた」(吉見 2014: 217-9)ととらえている。これは明らかに「まなざしの地獄」の演劇論的な視角への評価であり、その後の多くの評価の主流となった(吉見 2015)。もっとも、こうしたまなざしと演技というとらえ方が妥当なのか。ここでも、永山則夫の文脈にこだわってみたい。

永山による演技として見田 (2008: 45) は、「ポールモール」という外国産タバコをアピールし、学生と身分を偽る場面を例示する (永山 1971b: 171-2)¹⁰。

私は「じゃっ」と言って吸いはじめた。その奥さんは、クチャクチャになっていたにもかかわらず私の煙草が外国製なことに気付き、暫らく私の顔を黙って見ていた。

そして、「めずらしいタバコ、お吸いになっているのね」と言った。

「えっ、うん、ちょっとカザリのため」私はそう言って呟った。

と、その奥さんも呟った。そして、私に言った「あなた幾つなの」、と。この質問は、今までに何度聞かされたことであったか……。「二十二歳です」と答えたら、「じゃ、学生なの?」とまた尋ねた。私は煙草を深く吸い、そしていきなり吐いて言ってやった——「前はね……」。

これは、永山が川崎市で人足をしていた時期、市内の在日朝鮮人による廃品回収業の現場での会話である。このエピソードは、いかにも「都市のまなざしと演技」という図式に対応するもののように見えるかもしれない。たしかに、学生という身分を偽ることは、見田の言葉で言えば抽象的な「表相性」をめぐる演技ととらえることが可能である。

しかし、具体的な「表相性」については、演技としてとらえることに留保が必要に思われる。永山は、「ポールモール」という「洋煙」^{ようもく}を吸いはじめた理由について次のように説明する。「他の“人足”たちがたいがい安っぽい『シンセイ』をチビタになっても吸っているそのみじめたらしさを見て、すぐく反撥を感じたことにあった。当時のN少年にとっては、その金の高い洋煙が何かしら気分を和いでくれる唯一のものであった」(永山 1984: 160)¹¹。

ここで注目したいのは、「カザリ」=演技とされる「洋煙」が、見田の議論に即して述べれば、青森・板柳時代の家郷の生活と貧困の象徴として忌み嫌った麦飯 (見田 2008: 11) と同様に、貧しさへの嫌悪感から語られていることだ。永山が麦飯を遠ざけるのは、白米による「見栄」を表出するためではなく、麦飯が家郷の生活を思い起こさせるためであった。この点から素直に考えるならば、この「洋煙」は、「都市のまなざし」に対する演技というよりも、家郷嫌悪と切実な貧困への忌避という点からとらえておくべきではないだろうか。

このように考えた場合、「派手好み」、「イキがり」、「見栄っ張り」、「自己顕示欲」とされる永山の高級品好み (見田 2008: 43) についても、演劇論的な解釈からの転換が必要かもしれない。実際、石川鑑定書により明らかにされたように、永山の上京前の洋品店での服の万引きは、母親に対するあてつけという、服を「見せびらかす」演技や「自己顕示欲」以上の、切実な動機と意味が隠されていた (堀川 2013: 155)¹²。また、「派手好み」、「イキがり」、「見栄っ張り」、「自己顕示欲」が一貫して見られたのかという点にも注意が必要である。見田 (2008) の根拠となった鎌田 (1970: 279) の記述では、煙草、腕時計、ライターのひとつが外国製になっていくのは、名古屋での3件目の殺人事件以降であることが明らかにされている。永山自身も、「高級品嗜好」や、「演技」というとらえ方に対する批判を行い、その〈動機〉を見るべきであると見田を批判する (永山 2017[1977]: 229-30)。

以上の点からすると、「ほとんど無限の可能性をたたえた〈別世界〉」としての東京という舞台での演技とする解釈は、こうした永山の「実存」を覆い隠すヴェールとなっていないだろうか。

2.3 「尽きなく存在し」ようとする人間の個別性から

「まなざしの地獄」は、実存と解放をめぐる社会学的分析の代表作であり、すぐれた都市論、家郷論、階級論、日本近代論、実存とまなざしに関する演劇的な洞察と評価されている（吉見 2014：215）。そして、こうした「まなざしの地獄」に対する位置づけは、その後の受容・継承・展開の典型となっていく¹³。また、都市論にひきつけて考えてみても、「外見への配慮にとりつかれ『普通』の基準をまさぐる」（西澤 2015：37）都市の人びとを描き出すという、ジンメルの大都市に関する著名な議論を引き継いだ都市社会学の流れとも接合しやすい。このような形で、「まなざしの地獄」は、「尽きなく存在し」ようとする人間の投企をくじく都市のメカニズム、貧者を生み出すメカニズムを理解する際に参照され続けたと言えよう。

しかし、こうした把握が重要な点を見過ごしてきたのではないかというのが、永山則夫の個別性から別の解釈可能性を追求した本節での試みである。「まなざしの地獄」の演劇論的な解釈は、永山則夫の個別性ではなく、一般化された方向に誘導するが、はたして、「永山は社会が生み出した『幻想』によって上京し、そこでその『幻想』に幻滅し、犯罪を起こすことになった」（片上 2015：108）というように一般化する形で「まなざしの地獄」を受けとめてしまっただろうか。

この点について小形道正は、「〈都市〉の論理」という疎外要因を鮮やかに析出しているが、図式的理解に留め置き、一般化された誰もが該当しう問題へと還元してしまっていると批判する。そして、「殺人がひとつの極限值として処理されることで、常に、それとは対となる平均値との関係でしか捉え」られず、「したがって、それは一点の曇りもない澄み切った明晰な論文であるとともに、当事者である永山則夫自身が抱く心情葛藤の固有性や、人間が人間を殺めるという行為の熱量や不気味さは綺麗に脱色されているともいえる」と指摘している（小形 2016：205）。「都市のまなざし」を一般化して語ることが、結果として「まなざしの地獄」に向き合うひとりひとりの個別の憂鬱や怒りといった感情自体も一般化してしまう問題をえぐり出すものだ。

これに対して、永山の生活史記録の個別性にこだわって見た場合、都市への斥力と引力、都市という舞台のとらえ方、都市のまなざしと演技について、演劇論的なとらえ方とは異なる別の可能性が見えてくる。それは、 $N \cdot N$ = 永山則夫の「個別性」から把握された、都市への斥力と引力の恐怖と、恐怖に向き合う姿だ。見田は、永山則夫の演技について、「この〈演技〉こそはまさしく、自由な意思そのものをとおして、都会がひとりの人間を、その好みの型の人間に仕立てあげ、成形してしまうメカニズム」（見田 2008：60）ととらえる。しかし、〈演技〉の陥穽を、文字通り演劇論的把握によって回収してしまうのではなく、さらに言えば、 $N \cdot N$ 論として一般化するのではなく、本節で試みたように、個別性からとらえる必要があるのではない。そして、このような把握により、「尽きなく存在し」ようとするひとりひとりの個別性、還元不可能な関係性の総体としての都市を把握する見田の都市論、そして「貧困とは貧困以上のものであること、それは経済的カテゴリーである以上に、社会的存在論のカテゴリーであること、貧しさが人間を殺すということ」（見田 2008：52）とする見田の貧困論の最も豊かな部分を受け継ぐことができると思われる。（松宮）

3. まなざす側の不安、まなざしと生活

3.1 見田による離職の分析

見田は、「N・Nは年内に1度、3年間に7回も転職している。このことがのちにN・Nの犯罪とむすびつけられ、各種マスコミの報道などでは、『職業転々』、『転落の足跡』などとキメつけられることになる」(見田 2008:23)と指摘し、永山理解のポイントの一つとなったことを指摘している。転職回数について、永山の精神鑑定を行った石川義博医師による鑑定書と、石川医師が永山から行った100時間を超える聞き取りの録音テープに基づいて永山の生活史を再構成した堀川恵子は、永山の逮捕までに「記録に残っている仕事は10ヶ所にのぼり、さらに細かなものまで加えると20近くになる」(堀川 2013:160)と指摘している。事件当時話題となっていたよりも、実際には永山ははるかに多くの転職を経験していたことがわかる。

ただし、見田は、「転職はじつはこれらの青少年の中で少しもめずらしくない」(見田 2008:24)とし、永山が例外的存在ではなかったことを述べる。そのうえで見田は、この転職を規定する要因として、休日に注目する。労働省の『年少労働者就労状況調査』(労働省婦人少年局 1967)のデータから、休日が少ないほど離職率が高まるという関係を見出す。さらに見田は、同じ調査から「給料の高さとも、休日制に見られたほどの明確な相関はない。このことは彼らの欲求と不満の質を暗示している」(見田 2008:27)と指摘する。つまり、「雇主たち、そしておそらく大人のだれもが、ほんとうには『わかっていない』」(見田 2008:26)ということへの不満があるとする。そして、「都会における彼らのその時どきの生活の、必然性の意識の希薄、存在の偶然性の感覚、関係の不確実性、社会的アイデンティティの不安定、要するに社会的存在感の希薄」(見田 2008:27-8)を読み取る。ここから、流入青少年たちの〈関係憧憬〉が存在するとする。

一方、東京都の『流入青少年実態調査報告書』から、東京で就職した青少年の不満足な点として、「落ちつける室がない」、「自由時間が少ない」が相対的に多く挙げられていることを示す。ここから、見田は東京に暮らす青少年たちが、「関係からの自由への憧憬、孤独への憧憬」(見田 2008:36-7)を有すると説明する。つまり、都市に暮らす青少年の離職は「自由な時間がほしい」という形で説明されること、そして、その自由時間への欲求は〈関係からの自由への憧憬〉によって根拠づけられるとする。このことはN・Nにおいても同様であり、離職という「脱出」(見田 2008:30-1)を繰り返すこととなる。この〈関係からの自由への憧憬〉は、「過去を本人の『現在』として、また本人の『未来』として、執拗にその本人にさしむける他者たちのまなざしであり、他者たちの実践」(見田 2008:38)によって生じる。すなわち、「まなざしの地獄」が、〈関係からの自由への憧憬〉を生み出すことになる。大人たちは「わかっていない」からこそ、「わかってくれる関係」を望み、あるいは「わかっていない」からこそ、「わかってくれない関係」からは逃れたい、という関係をめぐる2つの相対立した欲求を持つということである。そのうえで見田は、「後者(〈関係憧憬〉——新藤)の関係欲求以上に、前者(〈関係からの自由への憧憬〉——新藤)の関係嫌悪の方が、広汎に感覚されているという事実」(見田 2008:37)を指摘している。

このような分析と並行して、見田は、当時発表されていた永山に関するポルタージュである『殺人者の意思』(鎌田 1970)をもとに永山の離職の状況を検討する。そこから見田は、「N・Nがまさしくそこから自由であろうとしている過去性によって彼を規定し、彼が生涯どうもが

いてもついてまわる一片の事実性において、彼の存在の総体をあらかじめピンどめにしてしまう」（見田 2008：31）ことを指摘する。つまり、「周囲が過去性によって存在の総体をピンどめしようとするがゆえに関係からの自由への憧憬」が存在するということになる¹⁴。

3.2 まなざす側の不安

ただし、見田の解釈に違和感を覚える点として、「まなざす側の不安」への言及が十分ではないことが挙げられる。見田は永山を含めた流入青少年の視点から、雇い主らが「わかっていない」との欲求と不満を持つことを指摘した。それは、まなざされる流入青少年の認識としては妥当である。しかし、雇主側としても、遠方出身の青少年を雇用することには相当な不安がある。ある一つの「過去性」にこだわりすぎるのは問題といえるが、「存在の総体」を丸ごとわかることは、そもそも不可能なことである。そのなかで、過去性を一つずつ手がかりとして「存在の総体」に近づいていくのが、実際の人間関係の形成過程ではないだろうか。雇用した青少年の「存在の総体」がわからないということは、まなざす雇い主側からみても相当に不安なことである。

「事実」として受け止めるには留保が必要だが、永山の自伝的小説¹⁵には次のような一節がある。知り合いの紹介を受け、素性も知らぬ永山を雇った大阪の米屋の店主が、戸籍謄本を提出するように永山に求めた後に、永山の母から手紙が届いた場面である。

その数日後に、母から手紙が来て、大将から受取った。／「これ、あんたのお嬢やんかァ」／「はい」／「さよか。青森やったんかいの……」／「はい……」／Nは、一安心した。大将の方はもっと安心したらしかった。（中略）その日は久しぶりに明るい雰囲気の中かで過ごせた。（永山 1990[1990]：187）

永山の母親からの手紙の到着を知って、当の永山よりも「もっと安心したらしかった」というのは、まなざす雇主側の不安の大きさを物語る。

実際に、雇主側は、すぐに職場を変える者の少なくない流入青少年たちに不安を覚えていたと考えられる。「まなざしの地獄」でも、「67年の中卒の就職者のうち、過半数の52%までが3年以内に転職している（高卒は54%）」（見田 2008：24）とのデータが紹介されている。また、時期はややずれるが、1956年3月中卒者で東京に就職した者の離職率をみると、企業規模が小さいほど離職率が高いことがうかがえる（表）。

表 事業所の規模別に見た就職後の離職率（1956年3月中学校卒業者）（山口 2016：83）

	1 カ月後	3 カ月後	6 カ月後	9 カ月後	1 年後	1 年半後
4 人以下	11.3	22.2	30.4	35.8	39.7	45.1
5 ～14人	5.8	13.2	22.1	26.3	29.5	33.8
15～49人	2.8	7.8	15.2	19.4	23.6	31.1
50～99人	4.3	12	22.3	26.8	31.3	36.1
100人以上	1.9	4.5	7.9	10.2	12.3	15.4
全体	3.4	8.1	14	17.3	20.2	24.3

(%)

出所：東京都労働局総務部調査課（1958：10）

さらに、見田も参照していた労働省の『年少労働者就労状況調査』では、「事業所の意見、要望等」として、「年少労働者の職場適応を高めることについての意見、要望」がまとめられている。そのなかでは、

- ・進学率が高まるにつれて中卒就労者の質の低下が目立っているが企業では若年者の不足により非行少年、身体的欠陥のある者、精薄に近いものまで採用せざるを得ない実情である。このような特殊な階層を指導育成し社会性を持たせる必要を痛切に感ずる。
- ・退職理由がごく些細な事が多い。そのため年少者の確保、職場適応をはかるためには福利厚生施設の拡充、各種クラブ活動の奨励等仕事以外の面を充実させることも大切である。
- ・終業後の時間の管理に非行化防止の意味において、いろいろ配慮しているが、弱小企業では資力もなく困っている。

といった声が紹介されている（労働省婦人少年局 1967：48）。このように、永山の就職先である零細企業の雇主たちは、永山だけでなく、つねに入職した年少労働者の素性や資質、定着について不安を抱えていたことが想像される。そのため、少しでも長く働いてくれる人材を探すための雇主側のまなざしが流入青少年に注がれる。

さらに、まなざしを向けるのは、雇い主ばかりではない。当の流入青少年も、都市に対し、まなざしを向ける存在であった。「まなざしの地獄」の発表以前に、天野郁夫（1967）は、1966年に中小規模の製造工業に働く16～24才の男子流入青年1,435名対象にした調査の分析を行っている。そこでは、「流入後の青年たちは60%近くが、雇用条件が予想と『まったくちがっていた』（18%）『かなりちがっていた』（41%）と答えており、しかもこの予想と現実の条件のズレは、『仕事の内容』および『給料』に集中している」（天野 1967：21）と指摘している。また、流入青年の悩みをまとめた結果、「流入当初」は「会社のようなすがわからない」が約7割となっていることを挙げている。会社や都市をまなざす流入青少年たちにも、大きな不安が見て取れる。山口が指摘するように、「暴力の町」「公害の町」とのイメージが広まり、若年労働者の確保が進まなかった兵庫県尼崎市が、1950～70年代に市を挙げて町のイメージアップに取り組んだ（山口 2016：235-70）ことから、都市もまたまなざされる対象であったことがわかる。

永山の自伝的小説（永山 1988, 1989[1990], 1990[1990]）からは、まなざされる永山とま

なぞ雇主との双方の不安が、互いの関係をこじれさせ、最終的に離職につながる様子が見出される。さらに、これらの自伝的小説には、永山の同僚との関係も描かれている。加えて、大阪府守口市の米屋を主な舞台とする「異水」（永山 1990[1990]）では、見も知らぬ永山に大阪駅で声をかけられた「白髪の多い50代でNよりも背丈の高い男」（永山 1990[1990]：137）が、食事や宿を世話したうえで、永山のために2日間を費やして米屋に何とか就職口を見つけるシーンが描かれている。また、鎌田（1970）では、見田が引用する範囲でも、フルーツパーラーでの新人研修（見田 2008：9）、米屋の戸籍謄本問題（見田 2008：29）、牛乳店で見せた向学心（見田 2008：44）など、永山の都市での具体的な人間関係がうかがえるエピソードが紹介されている。つまり、永山は都市において個々の人々との具体的な人間関係を営んでいる。

天野は、先述のデータから、流入当初と調査時点との状況を比較し、「現在」の悩みとして「会社のようにわからない」を挙げる者は約2割とかなり減少していることを明らかにしている。見田は、「わかってくれない」職場関係だから休日を求めると解釈したが、そうだからこそ互いにわかりあえる職場関係に変えていこうと流入青少年と上司や雇主たちは関わるのだろう。そのことが、流入青少年の不安の解消につながっていると思われる。

しかし、奥村隆が指摘するように、『『まなざしの地獄』を生む『都市の他者たち』はどちらかというと同様なものとして想定されている』（奥村 2016：350）。そうであるがゆえに、永山を取りまく「まなざす側の不安」は描出されない。流入青少年と都市の他者との互いが感じる不安の相互作用という過程は、「まなざしの地獄」でははたして十分に描かれていたのだろうか。

3.3 まなざしと人々の生活

「まなざしの地獄」の解説を書いた大澤真幸は、「統計的な調査」と「参与観察やあるいはライフヒストリーの聞き取り調査等」の方法の「分裂は不可避であるように思える」としたうえで、「ところが、『まなざしの地獄』は、2つの方法を架橋し、それぞれの欠点を同時に克服してみせている」（大澤 2008：103）と指摘する。この点は、見田自身も、「数量的データ」と『『質的』なデータ』の「2つのタイプのデータの利点をどのように統合するか、確実に、しかも深みのある分析はいかにして可能だろうか」（見田 [1965]2012：138-9）ということに関心を抱いており、「質的データ」と「量的データ」の統合に意を注いだと考えられる。この点が、「まなざしの地獄」が高く評価される理由の一つでもある。そして大澤は、「自由時間（休日）がないことと個室がないこと」への不満から、見田が「都市の他者たちから注がれるまなざしの地獄から逃走しようとする、当時の青少年たちの切実なる欲望を読み取る。言い換えれば、N・Nの犯罪を駆動したのと同じ欲望が、これらの数値のなかに脈打っているのだ。こうした解釈こそ、統計的事実の中に実存的意味を見出すことである」（大澤 2008：105）と評価する。

しかし、本稿の検討からは、見田の統計の解釈と永山の事例とは、十分に結びついているとはいえない。逆に、結びつきのない統計と永山の事例の「いいとこどり」をしながら、実際には存在しない都市の流入青少年像が見田によって構築されているようにも思える。そこには、人々の生活に立脚して「まなざし」を捉える視点が不足している。

かつて鈴木榮太郎は、その代表的な著書である『都市社会学原理』を「人の生活のありのままの姿の観察」から書き始めた（鈴木 [1957]1969：19）。このように、都市住民の「生活」に着目することは、都市社会学の基礎的な研究手法として捉えられる。そして、永山を雇ってきた中小零細の卸・小売業の経営者たちは、その「中小零細卸・小売業」という生活であるがゆ

えに、永山を含めた流入青少年に、不安と、そこからくる猜疑のまなざしを向けざるを得なかった。逆に、流入青少年も、故郷を離れて都市へと流入したという生活のあり方により、会社や都市全体への不安なまなざしを向けざるを得なかった。

見田の議論では、いかなる生活を繰り広げる人々がまなざしているのかという、「まなざす側」と「生活」が看過されている。しかし、永山に向けられたまなざしは、まなざしを向けた人々の生活の種類だけ存在したはずである。そこにこめられる意味や、そうならざるをえないまなざしの性格への配慮があまりに不足している。こうした都市の人々の生活の多様性を脱色し、生活と遊離したところに、「まなざされる側」だけを位置づけたところで描かれたのが「まなざしの地獄」であったとの感が拭えない。

それは古臭い社会学的方法に固執したいいがかりかもしれない。ただ、先述の奥村は、社会学の入門書のなかで次のように指摘した。

「確かに『社会』がある」という実感、それは、多くの場合、このような生きにくさや苦しさ、社会と私との『ズレ』『違和』があるときに生じる。……『社会学』はこの『違和』から出発する。そして、その『違和』を解明するために（最終的には解消するために）、そこに確かに存在する『社会』を研究していくのだ。（奥村 1997：6-7）

見田の「まなざしの地獄」が、かくも多数の有能な社会学者を魅了し続けたのは、かれらが感じる「違和」がそこに見事に描き出されていたからであろう。しかし、われわれは、そのような状況にこそ「違和」を感じる。「まなざしの地獄」において永山の生活史を通じて記述された「違和」は、多くの社会学徒の「違和」であって、永山の「違和」ではないと思われるからである。その理由は、本稿を通じた永山の〈生活－文脈〉¹⁶をたどる作業で示されている。ここにこそ、まなざしを論じるうえでも「生活」に着目することの必要性が見出されるだろう。（新藤）

おわりに

ここまで見田宗介の『まなざしの地獄』について、各執筆者が論じた。最後に、本稿を通じて明らかになった点をまとめる。

〈生活－文脈〉理解研究会は、貧困の社会学研究を主なテーマとして成果を公開してきた。そして今回、クリティークの第3弾として、見田宗介の『まなざしの地獄』を対象とした。それは、見田の「貧困とは貧困以上のものであること、それは経済的カテゴリーであるより以上に、社会的存在論のカテゴリーである」とする貧困への視角を本研究会も共有するためである。貧困とは再分配をめぐる経済的問題というより、差別や暴力をとまなう社会的問題である。この点で本研究会は見田の貧困論を共有している。

見田はその視角から主に都市論を展開した。それは都市論としても、またデータ解釈をめぐっても、華麗なものだった。そこで見田が「N・N論ではない」と述べたように、彼はN・Nの個別性ではなく、流入青少年の「一般的状況」として都市の総体性を捉えようとした。

それに対して本研究会では、永山の個性性、なかでも彼が家郷で過ごした生活の文脈や受け入れ先の状況から、『まなざしの地獄』を読み直した。端的に述べれば、見田の議論の華麗さからは、こぼれ落ちてしまう視点や事象に注目し、永山の生活を愚直に読み重ねていくことを各執筆者はめざした。

まず宮内は、サルトルの「成形」のケースを用いて、永山が都市に出て「成形」されたのではなく、家郷における被虐待経験ですでに「成形」されていた可能性について指摘した。見田は貧困の経済的な困窮具合によって成形されていく過程に注目する。他方、宮内は被虐待体験にもとづき永山が家郷で成形されていたことに注目する。経済合理性ではなく、被虐待のトラウマ体験によって、永山の身体は「成形」されていたのである。

続いて松宮は、永山が都市にひきつけられる引力より、家郷から追い出される斥力によって都市に脱出したと指摘した。見田は永山の高級品嗜好から、都市での演劇論的解釈を展開した。他方で、松宮は永山が白米による「見栄」ではなく、麦飯によって家郷での（虐待をうけた）生活を思い起こさせたことに注目した。そこから、都市への引力より家郷からの斥力によって永山の実在にせまった。

最後に新藤は、「まなざしの地獄」で多くの論者が注目し評価する「統計的事実の実存的意味」について再検討した。見田は流入少年らの離職率の高さと彼らが働いていた会社の休日が少ないことの相関関係に注目した。見田はそれを社会的存在感の希薄からまなざしを求める〈関係憧憬〉ではなく、むしろ執拗に彼らに差し向けられる他者のまなざしを嫌悪する〈関係からの自由への憧憬〉として解釈した。他方で、新藤は永山が都市において個々の人間との具体的な人間関係を築いていた点に注目し、雇主と流入少年らは互いに「わからない」からこそ相互作用を重ねて不安を解消しようとしたと指摘した。見田の議論では、こうした流入少年の生活の多様性や創造性が看過されている点を批判した。

見田の華麗な都市論と比較したら、3名の議論は「地味な」議論であるかもしれない。しかし永山の個性性から貧困の実存的意味を描き議論することに、本研究会はこだわった。幼いころに虐待を受けた永山は、身体感覚として後先考えずに家郷から脱出した。それは都市で演技することより、とにかく家郷を嫌悪した結果の脱出であった。

「貧困とは貧困以上のものであること、それは経済的カテゴリーである以上に、社会的存在論のカテゴリーである」という見田の貧困論を、本稿の議論は引き継いでいる。生身の身体をもった人間の生活の文脈を読み取ることで、貧困の実存的意味にせまることは可能である。

最後に、本稿の冒頭に掲げたサルトルの文章にもう一度戻って、本稿を閉じたい。サルトルはこう書いていた。「われわれの社会においては人間を労働力、ただひたすら労働力との関連においてのみ扱う」(Sartre 1974=1975: 153)。人間には、身体的特徴から名前まで、徹底的な固有性が存在する。その固有性は、かけがえのないものだ。だからこそ、たとえば一人の人間が亡くなったとき、特有の感情を私たちは持つ。一方で、この〈かけがえのなさ〉を、あらゆる事柄において皆が引き受けていたのでは、社会は存立が難しい。〈かけがえのなさ〉を捨象して、ある範疇—たとえば「若年労働力」—として扱うことによって、人間を特定の社会的配置に振り分けることが可能になる。〈かけがえのなさ〉と抽象的範疇の間のこの入り組んだ関係をめぐっては、『まなざしの地獄』でも次のように指摘されていた。

都市が要求し、歓迎するのは、ほんとうは青少年ではなく、「新鮮な労働力」にすぎない。

しかして「尽きなく存在し」ようとする自由な人間をではない。(見田 2008:19)

それはまた「存在の飢え」と「生理的な飢え」の関係としても記述されている(見田 2008:51)。「生理的な飢え」については、労働力の金の卵として解消することができたかもしれない。だが、「ここで絶対に満たされなかったものは、社会的差別、自己のアイデンティティの否定性、あるいは存在の餓えとでもいうべきものであった」(見田 2008:51)。N・Nという存在はここに関わるものだ。

社会科学には抽象的範疇が不可欠であるが、その範疇と〈かけがえのなさ〉との間の抜き差しならぬ関係をめぐって考察したのが、『まなざしの地獄』であったと言えるだろう。抽象的範疇を使いながらも、そこからの余剰—〈かけがえのなさ〉—を掬い取る方法論の模索が、いま改めて問われていると言えよう。(打越・石岡)

付記

本稿は、JSPS科研費25590128と群馬県立女子大学特定教育・研究費の助成を受けたものである。

注

- 1 正確には、以下の引用。ジャン＝ポール・サルトル、1966(白井浩司・平井啓之訳)『聖ジュネ』第1分冊、『サルトル全集』第34巻、人文書院、33頁(原著1952)。
- 2 細見は、永山則夫による「自伝的小説」である「木橋」以降の作品において、永山本人が主人公を「N」と表記することが、見田宗介による影響の可能性を指摘している(細見2010:205)。
- 3 永山則夫による回想録のような「自伝的小説」である「なぜか、アバシリ」では、「網走市呼人村番外地」と記入されていたと記されている(永山 1984)。
- 4 鎌田(1970)には、この時の永山則夫の退職をめぐる二つの物語が並べられている。まずは、本稿でも述べた永山則夫が自身は網走刑務所で生まれたのかと誤解し、周囲が辞めさせたがっているように感じての退職である。次に、米穀店側からの物語である。永山則夫が誤って蛍光灯を割ってしまい、その破片が米の中に入ってしまったので、店側が叱ったところ、突然辞めてしまったというのである(鎌田 1970:231)。
- 5 宮内(2017a)においても紹介しているように、周囲の人たちが『網走番外地』を話題にする描写は多々ある。永山則夫による「自伝的小説」においては、映画「番外地」シリーズを永山本人は観ていないように描かれている。ちなみに、「地理的、歴史的にみて、“最果ての地”として語られることが多い網走は、その都市イメージが刑務所と結び付けられる、国内では他に類を見ない町」であるが、小説や映画によってそのイメージが増幅され、映画『網走番外地』とその後のシリーズによる影響は大きい(横田 2012)。ただ、このように記述する横田本人は、永山則夫による自伝的小説等は読んでいる形跡はないと思われ、本文中でも少し触れるくらいであり、文献一覧にも挙げてはいない。
- 6 永山則夫自身は自伝的小説「異水」において、この時のことを以下のように描いている。「手紙と一緒に、『戸籍謄本』が入っていた。一枚の青い写し紙であった。／『北海道網走市呼人』まではごく自然な感情で読め

た。その直後に、『番外地生』とあった。Nの頭の中が空白になった。／『北海道網走市呼人番外地生』／この地名がNの出生地であった。愕然とした。／——俺は、刑務所で生まれたのかっ！／Nは、これでは大将に出せないと思った。番地に数字を付けて欲しかった。大将へは番地を付けて貰って出しても遅くないはずだ。」(永山 1990:188, 引用者によって挿入された「／」は改行を示している。)

- 7 永山則夫の「自伝的小説」では、この頬の傷について、様々な職場で尋ねられるシーンが登場する。詳細は、宮内 (2017a)。
- 8 もっとも、見田自身の評価は、＜全体化的モノグラフ＞であることを目指したが、都市論と階級論の一部しか実現できず、＜都市＞の視点のみでは一面的であるというものである (見田 2011)。なお、「まなざしの地獄」の4回の改版については、副題が「都市社会学への試論」→「現代社会の実存構造」→「尽きなく生きることの社会学」と変化した点も含め、小形 (2015:187) が整理している。
- 9 「赤飯タイテ喜ブ」(永山 1971b:27) というエピソードは、自伝的小説である「土堤」(永山 1984:114)、「陸の眼」(永山 1989[1990]:10) でも繰り返し描かれたように、永山にとって極めて重要な意味を持ち続けたと考えられる。
- 10 1969年に逮捕された2年後に出版された著作『人民を忘れたカナリアたち』の一節であるが、永山則夫が獄中で著した自伝的な小説群の1つ、1981年8月に東京高裁の無期懲役の減刑判決が出された後の1983年に、『新日本文学』に掲載された「土堤」の一節でもほぼ同様の場面が描き出されている (永山 1984:171-2)。
- 11 『人民を忘れたカナリアたち』では、「他の人足たちが大概『シンセイ』などを吸っているのを見て反撥を感じる」ことに対する疑問もあるだろう。この点について一点補足すると、永山は、石川鑑定に基づき獄中で自身の行為の意味を反省的にとらえかえた上で、自伝的小説を執筆している点に注意したい。たしかに、永山は石川鑑定書については批判し (堀川 2013:307-9)、以下のように小説を書いた動機を表明している。

N少年の犯行に至る心理とそれまでの生活史は、石川義博『永山則夫精神鑑定書』を全面的に批判した『控訴趣意書』の罫紙千四百三十余丁を読めば、より詳しく知るだろう。しかし、その文書中の『N少年』は多くの人々の知るところとはならないだろう。

だから、N少年物語のこれらの小説が書かれることになったのだ。(永山 1984:251)

しかし、永山はカウンセリング的な機能を果たした石川鑑定書の内容を繰り返し丹念に検証し、小説という形で過去の経験を昇華したことが明らかにされている (堀川 2013:334-6)。本節で、1971年の永山自身の記録と、石川鑑定後に描かれた小説群の双方を示したのは、2つの時点の永山の解釈の共通性を確認するためである。なお、永山則夫の自伝的小説の位置づけについては、宮内 (2017a, 2017b) で論じられている。

- 12 この点は、自伝的小説「土堤」においても、母への憎しみから、「ギンギラの派手なまったく好みでないセーターを鷲づかみにして逃げ出した」ものとして描かれている (永山 1984)。
- 13 見田が構想した都市論、国家論の展開を「まなざしの地獄＝劇場」という視点からさらに展開した吉見 (2015) を含め、『現代思想 総特集見田宗介』(2015) に代表される初期見田社会学再評価の動きは、この点を強調するものとなっている。
- 14 山口覚によれば、集団就職自体がマイナスイメージをもってマスコミで扱われることはあった (山口 2016:48)。その点では、集団就職で都市へとやってきた永山が、ネガティブな「過去性」ととらわれる可能性はあった。しかし、集団就職ではないけれども、永山の上京と近い時期の1970年に閉山を迎えた北海道

音別町（現釧路市）の尺別炭鉱でみられた労働者の再就職とその家族の移動において、そこで本州への転校を強いられた当時の中学生たちの手紙からは、「自分たちが不安と悲しみを抱えながら閉山を経験し、転校してきたのにもかかわらず、移った先では『閉山』や、そもそも『炭鉱』自体が『過去』のものであるかのように扱われ、（中略）産炭地のことを『忘却』しているかのような本州の現状を前にして、悲しみや怒りを感じている様子がわかる」（新藤 2016：22）。つまり、「過去性」すらまなざされない流入青少年も確実に存在したことがうかがえる。なお、嶋崎尚子は、1960年度の福岡県における炭鉱離職者のデータ分析から、一般に農村から都市への移動としてイメージされがちなこの時期の集団就職のうち、相当な割合が炭鉱離職者子弟の都市への流入であったことを指摘している（嶋崎 2017）。

15 ここでの「自伝的小説」という表現は、「永山則夫による『自伝的小説』は、自らの記憶をもとに記した『自伝』ではない。カウンセリングによって生み出された数々のエピソードと、それに対する（永山の精神鑑定を行った——新藤）石川（義博——新藤）医師の解釈と分析が書き込まれた自らの『精神鑑定書』に依拠しながらも、アンビヴァレントな感情を内包しつつ書き記した、きわめて再帰的な小説と言える」（宮内 2017b：5-6、下線原文）という宮内洋の指摘をふまえている。

16 〈生活－文脈〉については、宮内（2008）を参照。「生活」の捉え方にはさまざまな方法があるが、本稿の執筆者は宮内の示した〈生活－文脈〉という捉え方を共有しているため、この言葉を用いた。

文献

- 天野郁夫，1967，「現代青年の生活構造と意識——流入青年の適応過程の分析」『教育社会学研究』22：18-36.
- Brunvand, Jan Harold, 1989, *Curses! Broiled Again!: The Hottest Urban Legends Going*, W. W. Norton & Company. (=1992, 行方均訳『くそっ！なんてこった——「エイズの世界へようこそ」はアメリカから来た都市伝説』新宿書房.)
- 堀川恵子，2013，『永山則夫——封印された鑑定記録』岩波書店.
- 細見和之，2010，『永山則夫——ある表現者の使命』河出書房新社.
- 石井光太，2009，『絶対貧困——世界最貧民の目線』光文社.
- 鎌田忠良，1970，『殺人者の意思——列車爆破狂と連続射殺魔』三一書房.
- 加瀬和俊，1997，『集団就職の時代』青木書店.
- 片上平二郎，2015，「転回点としての『宮沢賢治』」『現代社会学理論研究』9：105-16.
- 見田宗介，1965，『現代日本の精神構造』弘文堂。（再録：2012，「数量的データと『質的』なデータ」『定本見田宗介著作集Ⅷ』岩波書店，136-52.
- ，1973，「まなざしの地獄——都市社会学への試論」『展望』173：98-119.
- ，2008，『まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学』河出書房新社.
- ，2011，『定本見田宗介著作集Ⅵ』岩波書店.
- 宮本常一・山本周五郎・楳西光速・山代巴監修，[1959]1995，『日本残酷物語5——近代の暗黒』平凡社.
- 宮内洋，2008，「〈生活－文脈主義〉の質的心理学」無藤隆・麻生武編『質的心理学講座1 育ちと学びの生成』東京大学出版会，191-215.
- ，2012，「貧困と排除の発達心理学序説」『発達心理学研究』23(4)：404-14.
- ，2015，「貧困研究とトラウマ——もう一つの『まなざしの地獄』」『理論と動態』8：129-42.
- ，2017a，「永山則夫の『自伝的小説』における『頬の傷』と『戸籍謄本』をめぐる記述」『群馬県立女

- 子大学国文学研究』37：111-27.
- , 2017b, 『『異水』論序説——永山則夫の『自伝的小説』を起点とする幾つかの可能性について』平成29年度群馬県立女子大学国語国文学会大会配布資料.
- ・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行, 2014a, 「新たな貧困調査の構想のために——日本国内の貧困研究の再検討から」『愛知県立大学教育福祉学部論集』62：123-35.
- ・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行, 2014b, 「貧困調査のクリティック（1）——『豊かさの底辺に生きる』再考」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』120：199-230.
- ・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行, 2015, 「貧困調査のクリティック（2）——『排除する社会・排除に抗する学校』から考える」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』122：49-91.
- 永山則夫, 1971a, 『無知の涙』合同出版社.（再録：1990, 『無知の涙 増補新版』河出書房新社.）
- , 1971b, 『人民をわすれたカナリアたち』辺境社.
- , 1984, 『木橋』立風書房.（再録：2010, 『木橋（新装版）』河出文庫.）
- , 1988, 「なぜか、海」『文藝』1988年文藝賞特別号.（再録：1989, 『なぜか、海』河出書房新社, 93-178.）
- , 1989, 「陸の眼」『文藝』1989年文藝賞特別号.（再録：1990, 『異水』河出書房新社, 5-117.）
- , 1990, 「異水」『文藝』1990年夏季号.（再録：1990, 『異水』河出書房新社, 121-245.）
- , 2017[1977], 『反一寺山修司論《復刻版》』アルファベータブックス.
- 西澤晃彦, 2015, 『貧困と社会』放送大学出版協会.
- 小形道正, 2015, 「まなざしの誘惑」『現代思想』43(19)：180-93.
- , 2016, 「事件を描くとき」奥村隆編『作田啓一vs.見田宗介』弘文堂：180-214.
- 奥村隆, 1997, 「社会学になにができるか——なめらかさからの距離」奥村隆編『社会学になにができるか』八千代出版, 1-38.
- , 2016, 「反転と残余——ふたつの『自我の社会学』におけるふたつのラディカリズム」奥村隆編『作田啓一vs.見田宗介』弘文堂, 342-96.
- 大澤真幸, 2008, 「解説」見田宗介『まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学』河出書房新社, 99-122.
- Park, Robert E. and Ernest W. Burgess, 1916, *The City*, University of Chicago Press. (=1965, 笹森秀雄訳「都市」鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房.)
- 労働省婦人少年局, 1967, 『年少労働者就労状況調査 昭和42年3月——年少労働調査資料第57集』労働省婦人少年局.
- Sartre, Jean-Paul, 1952, *Saint Genet*, Librairie Gallimard. (=1966, 白井浩司・平井啓之訳『サルトル全集 第34巻 聖ジュネ1』人文書院.)
- , 1974, *On a Raison de se Revolter*, Gallimard. (=1975, 鈴木道彦・海老坂武訳『反逆は正しい I——自由についての討論』人文書院.)
- 嶋崎尚子, 2017, 「炭鉱離職者対策初期における労働者の広域職業移動——『炭鉱離職者就職通報』個票データによる分析」『エネルギー史研究』32：1-14.
- 新藤慶, 2016, 「炭鉱閉山がもたらす子どもの生活と意識の変容——尺別炭鉱閉山前後の中学生の作文・手紙を通して」『JAFCOF釧路研究会リサーチ・ペーパー』9：1-24.
- 鈴木榮太郎, [1957]1969, 『都市社会学原理』（鈴木榮太郎著作集VI）, 未来社.
- 東京都労働局総務部調査課, 1958, 『学校卒業者離職状況調査報告（労働調査資料No.18）』.

- 山口覚, 2016, 『集団就職とは何であったか——〈金の卵〉の時空間』ミネルヴァ書房.
- 横田勉, 2012, 「網走市における行刑施設の受容と共存」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』14: 43-69.
- 吉見俊哉, 2014, 「見田社会学と文化の実践」吉見俊哉編『文化社会学の条件』日本図書センター: 211- 4.
- , 2015, 「まなざしの檻——見ることの権利」『現代思想』43(19): 132-47.

A Critique of the Research of Poverty in Japan (3): Thinking from the “Manazashi no Jigoku”

Hiroshi Miyauchi, Ashita Matsumiya, Kei Shindo,
Tomonori Ishioka, Masayuki Uchikoshi

Key Words

Manazashi no Jigoku, Norio Nagayama, the Urban, dramaturgy, the context in everyday life

Abstract

This paper publishes as a series of products of a collaborative research project, the Seikatsu-Bunmyaku Rikai Kenkyukai. In this time, the paper concerns on “Manazashi no Jigoku” by Munesuke Mita, which is one of the classics of sociological research in Japan. In this paper, from the perspective of interpretive sociology, we reconsider the arguments raised by “Manazashi no Jigoku” with careful attention to singularity of N • N. In particular, by tracing back the actual life history of Nagayama Norio, doubts are raised regarding Mita’s argument. Specifically, 1) the context of “inflowing young workers” coming from the peripheral regions by collective employment is not captured, and 2) the context of employers who hire such young workers in urban areas is not taken into account. Discussion about the validity of the dramaturgy approach adopted by Mita is also developed.